

プレゼンテーションソフトの活用による 日本史学習の関心・意欲の向上

奈良県立生駒高等学校 教諭 鈴木 紀 江

Suzuki Norie

要 旨

日本史の授業におけるICTの活用が、生徒の日本史に対する関心及び学習意欲の向上に効果があるかを検証した。事前の意識調査から、授業が進むにつれて「暗記が苦手」であることを理由に日本史を嫌いだと感じる生徒が増加しているという現状が明らかになった。そこで、ICTを活用した授業を行った結果、事後の意識調査では「より理解が深まった」や「日本史に興味をもてた」と感じた生徒が50%を超えるという結果を示した。

キーワード： 日本史、ICT活用、プレゼンテーションソフト、関心・意欲

1 はじめに

近年、携帯電話を中心としたICT (Information and Communication Technology) 機器の若年層での普及が進行している。内閣府が行った「2011年度版青少年のインターネット利用環境実態調査」によると、高校生の95.6%が携帯電話・PHSを所有している(平成23年度)。このように高校生の身近にICTが普及する現代社会であるが、学校はどうだろうか。ICTが十分に配置され、学習を効果的に進めるために活用されているだろうか。

タブレットをはじめとするインターネット端末、デジタルカメラや電子黒板など教育活動に有益なICT機器は増加し、2001年に政府が発表した「e-japan戦略」以降、教育の情報化が推進され、ICTを授業に活用する取組が校種を問わず様々な学校で行われている。また、実証授業を実施した教員全体の97.3%がICT活用による学力向上への効果があるとの回答がある。(清水 他、2008)

しかし、一方で普通教室で日頃の授業において、学習効果を高めるためにICTを活用することはあまりみられない。その理由として、「ア プロジェクターなどの教室で使うための機器が十分でない。(中略) エ 機器の準備や片づけに時間をとられる、オ 教材作りに時間がかかる。」等が考えられる(猪迫、2007)などそのハード面において問題点があるのも事実である。そこで本研究では、現在学校にあるICT機器を活用することでその効果、とりわけ日本史学習への関心・意欲の変化を検証してみようと考え

2 研究目的

プレゼンテーションソフトを活用して日本史に興味をもちやすい方法で資料を提示したり、生徒が理解しやすいように個々の学習内容を関連化させて提示したりすることにより、日本史学習を嫌いだと感じている生徒も日本史学習への関心・意欲を向上させることができることを明らかにする。

3 研究方法

日本史の授業でプレゼンテーションソフトを用いて作成した教材を利用する。その授業を通して日本史学習に対する関心・意欲がどのように変化したかをアンケート形式による意識調査を行い、その結果を分析した。

4 研究内容

(1) 事前の意識調査による現状の把握

本校の第2学年の生徒のうち日本史B選択者（男子47名、女子49名、計96名）を対象にアンケート形式で事前の意識調査を行った。1回目を1学期末（6月）に、2回目を2学期中間考査前（9月）に実施したところ、「学習としての日本史は好きですか？」という質問に対する回答が1回目と2回目では表1のように変化した。

表1 日本史は好きですか？ (人)

	好き	嫌い	どちらともいえない
1回目（6月）	28（29%）	17（18%）	51（53%）
2回目（9月）	27（28%）	35（36%）	34（35%）

1回目に比べて2回目は「嫌い」と回答した生徒が増え、「どちらともいえない」と回答した生徒が減少している。1回目に好きと回答した生徒がほぼ変わらないと仮定すると、1回目に実施した時点で、好きとも嫌いとも判断できなかった生徒の約半数が「嫌い」へシフトしたと考えられる。

また、表1での回答の理由を複数回答で答えさせたところ、表2と表3のような結果となった。

表2 日本史を好きだと感じる理由を教えてください (人)

	1回目	2回目
歴史が好きだから	20（53%）	26（70%）
暗記が得意だから	13（37%）	10（27%）

表3 日本史を嫌いだと感じる理由を教えてください (人)

	1回目	2回目
暗記が苦手だから	16（33%）	23（32%）
授業や教科書が文字ばかりで退屈だから	7（15%）	12（16%）
出てくる言葉が難しいから	8（17%）	7（10%）
教科書にストーリー性がなくつまらないから	6（13%）	11（15%）
そもそも勉強が苦手だから	11（23%）	20（27%）

表2が示すように、日本史を「好き」と回答した生徒のうち最も多い理由は、「歴史が好きだから」であるが、「暗記が得意だから」という理由が1回目で37%、2回目で27%と大きな割合を占める。また、表3から2回の調査ともに、日本史を「嫌い」と回答した生徒の約30%がその理由を「暗記が苦手だから」としていることが分かる。アンケートの自由記述欄で、日本史を「嫌い」とする生徒が、「人物がたくさん出てくるとややこしいのであまり好きではない」や「時代が進むと覚えることが増えてむずかしく感じる」と書いていたことも注目される。

つまり、生徒にとって、日本史を「好き」もしくは「嫌い」と感じる理由に、いわゆる「暗記」が大きな要因となっていることが分かる。そのため、授業が進み学習内容が増加してくる9月に、学習内容を「暗記しきれない」という理由から日本史を「嫌い」と感じる生徒が増えてくるという実態がうかがえる。

(2) 課題設定の理由

前述の通り、表2、表3から「日本史＝暗記」と捉える生徒が多いことが分かる。では、いわゆる「暗記」を知識・理解の一つと捉えるならば、日本史学習における知識・理解とは何だろうか。

平成20年1月の中央教育審議会答申で、学習指導要領改訂の各教科等の改善の基本方針が示された。地理歴史科に関わっては、「社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、それらを活用する力や課題を探究する力を育成する観点から、各学校段階の特質に応じて、習得すべき知識、概念の明確化を図るとともに、コンピュータなども活用しながら、地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する方向で改善を図る。」と示されている。

テレビドラマを視聴する際に、登場人物の名前や職業、登場人物同士の人間関係を無意識のうちに覚えるのではないだろうか。そうでなければ、ドラマ全体の内容は理解できず、興味をもつことは難しい。

筆者はこれを日本史の学習を進めていくプロセスと似ていると考えている。日本史を学ぶ上でキーとなる基礎的・基本的な知識、概念に当てはまる人物名や歴史的事象の名称を習得できていなければ、事象の特色やそれぞれの事象を関連してつないでいくことは難しい。また、つながれていく基礎的・基本的な知識や概念、関連した事象の連続したストーリーこそが歴史であると考え。

そのため、社会的事象の意味、意義を解釈したり、事象の特色や事象間の関連を説明できるようになるためには、その前提となる基礎的・基本的な知識、概念を習得していかななくてはいけないとも考える。

一方で、高等学校学習指導要領解説地理歴史編の第1章総説の改訂の要点で、日本史Bについて、「学習において大切なことは、決して個別・詳細な知識を数多く記憶することではなく、それぞれの時代はどのような特色をもっていると考えられるのか、そしてそれがどのような変遷を遂げて現在に至っているのかを生徒自身が考察して大きな視点でとらえ、納得と理解を踏まえた自分自身の言葉で明確に表現できることである。歴史の大観的な理解のためには、主に空間軸にかかわる各時代の特色の総合的

な考察と、主に時間軸にかかわる時代の変遷の総合的な考察とが重視されなければならない。」とされている。このように、脈略なく基礎的・基本的な知識、概念をただ暗記していただくだけでは日本史の知識・理解にはならないと考える。基礎的・基本的な知識、概念を習得するには、「誰が」、「いつ」、「どこで」、「どのように」、「なぜ」などの観点で基礎的・基本的な知識・概念である人物や歴史事象同士を体系化していくことが本当の意味での日本史学習における知識・理解になっていくと考える。

次に意識調査から、生徒の日本史学習についての意識の変化から暗記と体系化して理解することとの関係について考察してみる。1回目のアンケートでは、日本史の好き嫌いに関係なく90%以上の生徒が「日本史は暗記科目だ」と回答していたが、2回目は80%に減少した。また、「日本史は暗記科目ではない」と回答した生徒に日本史を「嫌い」と回答した生徒がいなかったことも注目される。

この意識調査の結果から、日本史を好きな生徒ほど、日本史の学習とは、ただ脈絡なく基礎的・基本的な知識・概念を覚えるだけでなく、事象の特色や事象間を関連付けて理解しようとする傾向がみられる。言い換えれば、日本史が嫌いな生徒ほど「日本史は暗記科目だ」と考えてしまう傾向が強い。その結果、学習内容を関連付けできないまま基礎的・基本的な知識・概念を理解しようとするため、授業が進んで学習内容が増えてくると、知識・理解が進まなくなってしまうことになる。アンケートの記述回答では「もう覚えられないから嫌だ」といったものも複数みられる。

一方で、2回目のアンケートで「日本史を学習する上で最も大切なものは何ですか？」と質問してみると図1の回答結果が得られた。

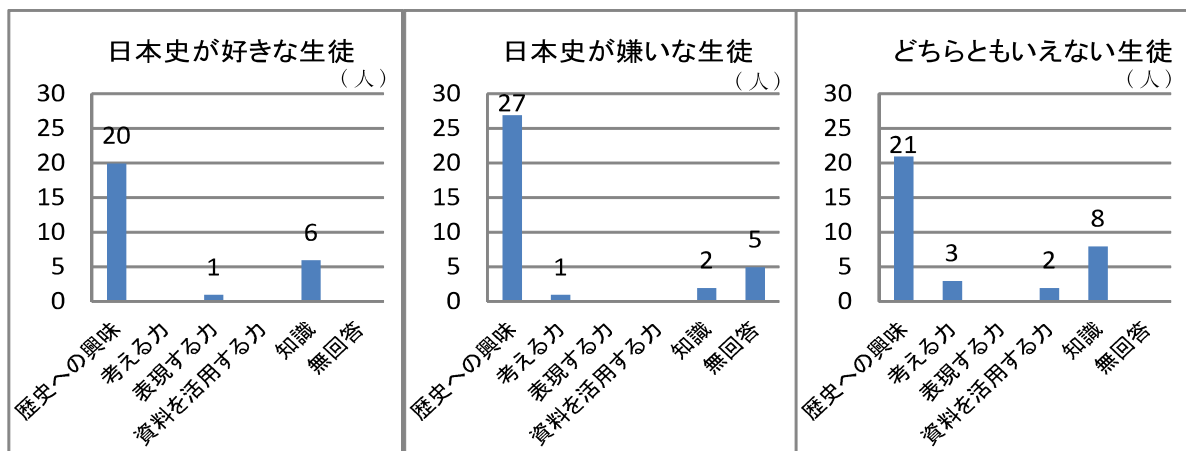


図1 日本史学習をする上で最も大切なものは何ですか？

日本史を学習する上で最も大切なものは、日本史の好き嫌いに関係なく70%以上の生徒が「歴史への興味」だと回答していることが分かる。特に日本史を嫌いな生徒に限ってみれば77%にもものぼる。

次に「日本史学習において自分に不足しているものは何ですか？」という質問では図2の結果となった。

この結果から、日本史に対して「嫌い」や「どちらともいえない」と感じている生徒ほど歴史に興味をもてていないということが明らかとなった。

以上のことから、日本史が嫌いな生徒は日本史を学ぶ上で歴史への興味が大切だと考える一方で、実際には興味をもてず、日本史学習を単なる語句を暗記するものと位

置付けてしまっている傾向がみえる。さらに、基礎的・基本的な知識・概念の習得をすることができなければ、より一層日本史に興味をもてなくなり、学習意欲が低下するという悪循環に陥る傾向が強いことがいえる。

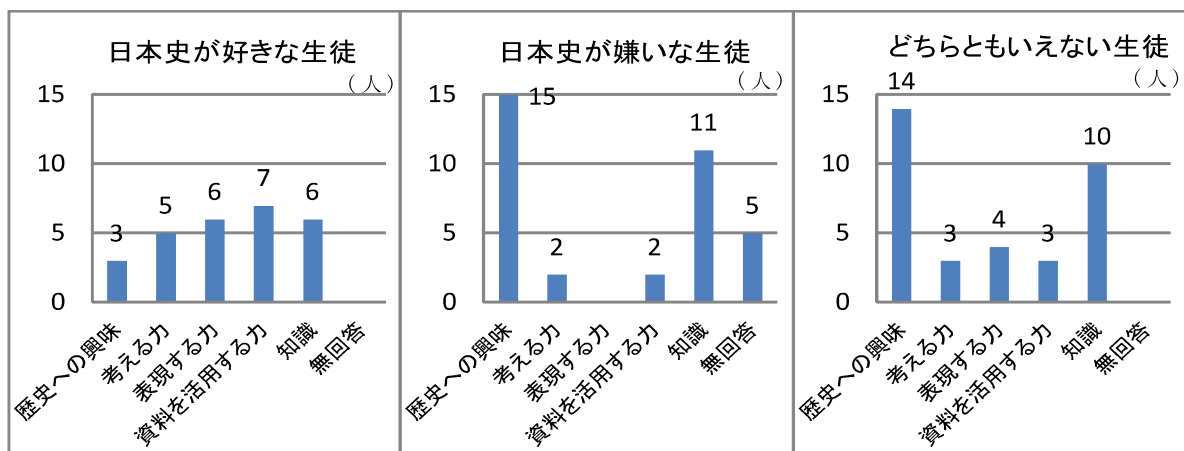


図2 日本史学習において自分に不足しているものは何ですか？

そのため、日本史に興味をもたせるような題材を設定していくとともに、学習内容を体系化して示していくことが最優先の課題であると考えた。そこで本研究では、ICT機器を用いて、基礎的・基本的な知識・概念を理解する際に、事象の特色や事象間を関連付けして、効果的に示すことができれば、生徒の日本史学習への興味が高まり、理解が進むのではないかと、更に意欲的に学習に取り組むきっかけになるのではないかと考えた。

(3) ICTを活用した授業の実施

ア 日本史Bの学習内容の特徴について

日本史Bの教科書の学習内容の特徴について、教科書に太字で記されている重要語句の数とカテゴリーについて調査した。

本校で使用する教科書（『詳説 日本史B』山川出版社）を、2学期に学習する単元ごとに、重要語句を政治、経済・社会、文化の三つのカテゴリーに分け、それぞれ重要語句がどのくらい配置されているのかを調べてみた。

表4 各時代の重要語句数の比較 (個)

単元	政治	経済・社会	文化
奈良時代	23	5	17
平安時代前期 (弘仁・貞観)	10	3	16
平安時代中期 (国風)	33	7	21

表4を見ると、各単元で政治分野の重要語句の割合が多いことが分かる。表4に示された三つの単元以外の時代においても、教科書で政治分野に割かれているページ数は多く、日本史学習では、まず各時代の政治に関することが示され、その後でその背景となった経済・社会と文化の学習をするというケースが一般的となっている。しかし、アンケートの自由記述には「事件の名前とか法律とかがむずかしい」という回答

がある一方で、「文化はその時代の人たちの生活が見えておもしろい」などの意見がみられ、政治は堅く難しいというイメージをもち、逆に文化には親しみやすさやおもしろさを感じているという記述も見られた。

そこで、生徒が比較的興味をもちやすい各時代の文化分野の学習を中心に、その時代の政治や経済・社会の内容を織り交ぜていく、すなわち、各單元において、文化の学習内容を中心に他の学習内容を関連付けして示していくことで、生徒が各単元の学習内容に興味をもつことにつながるのではないかと考えた。

その際に、高等学校世界史において、「情報量の多さと内容の複雑さが生徒の理解を妨げ、結果として学習意欲の低下をもたらしている。」と状況を分析し、電子黒板を用いて、「教師と生徒の双方向の授業実践が生徒の理解を深める上で効果があったと考えられる。」(大島、2007)とした実践例を日本史と同様の状況と考えて参考にした。しかし、本校では普通教室で電子黒板が使用できない状況である。そこで大型モニターを設置している特別教室でプレゼンテーションソフトを利用して、電子黒板と同様の効果を得ることができないかと考えた。

イ ICTを活用した授業の教材の作成

今回、プレゼンテーションソフトで掲示するデータは以下の三つである。

- (ア) 教科書・資料集に掲載されている資料
- (イ) 教科書・資料集に掲載されていない資料
- (ウ) 生徒が夏休みの課題で現地を撮影した写真

生徒が前方の大型モニターを注視して、特に重要な内容に関する説明を聞けるように、(ア)を提示した。(イ)は(ア)の補足として使用した。また、(ウ)は夏休み中の課題として身近にある寺院の現地散策レポートを作成させた際に撮影した写真を使用した。生徒自身が実際に現地へ足を運んで撮影してきた文化財と学習内容とを結び付けることで、日本史学習への関心や意欲を高めることを目指した。

ウ ICTを活用した授業の実施

生徒が興味をもちやすく、政治、経済・社会、文化という学習内容の関連付けを促す授業をプレゼンテーションソフトを活用して実施した。具体的には、2学期に学習する奈良時代、平安時代前期(弘仁・貞観文化の時代)、平安時代中期(国風文化の時代)の各時代の学習に入る、最初の1時間を導入の時間とし、文化を中心とした題材に政治、経済・社会など歴史を構成する要素を総合した幅広い見方で把握させることを意図した教材を作成して示した。生徒がこの1時間によって、各時代を大観でき、その後、各時代を学んでいく際に、学習内容に対する関心を高めるきっかけとなることを目指した。

表5はICTを活用した授業の実施例で、ICT機器をどのように活用し、その中でどのような効果を狙ったかをまとめたものである。

表5 日本史授業におけるICTの活用について

例①	時代	奈良時代
	分野	政治、文化
	内容	聖武天皇の鎮護国家思想の中で、平城京には南都七大寺と呼ばれる大寺院が建立された。
	資料と活用	資料は、前述の4(3)イの(ウ)を使用する。実際に現地にいるような臨場感が感じられるように建物の入口から内部へ、また、内部に入った後に視点を左右に振ったときに見える状況を複数の写真データを利用して提示する。資料を収集してきた生徒に現地に行った感想を発表させる。
	効果	教科書・資料集で見ると、実際に現地で見学しているような臨場感をもって学習することができる。また、自分たちの身近にある文化財と教科書等に掲載されている学習内容をつなげることで、学習内容に対する興味を深める。
例②	時代	平安時代前期(弘仁・貞観文化の時代)
	分野	経済・社会、文化
	内容	空海や最澄によって中国からもたらされた密教が日本国内で広まり、それにともなって密教の影響を受けた文化が展開した。
	資料と活用	資料は、前述の4(3)イの(ア)、(イ)の資料を使用する。奈良時代の仏像や寺院建築と密教の仏像及び寺院建築の資料を同時に見ながら比較させ、差異や気付いたことを発表させ、大型モニター上に直接書き入れる。
	効果	異なる時代のものを並べて比較することができ、生徒の意見をその場で図版中に書き込むことにより、クラス全員で情報を共有することができる。
例③	時代	平安時代中期(国風文化の時代)
	分野	政治
	内容	藤原北家は他氏排斥を行うことにより、藤原北家出身の公卿の数が増加した。
	資料と活用	資料は、前述の4(3)イの(ア)の「藤原家出身公卿の変化」のグラフを使用する。グラフ上で注目してほしい部分の色が口頭説明に合わせて変化するようにした。
	効果	生徒全員が顔を上げて資料に注目することができ、また、「今は資料のどこを見るべきか」を明確に、または強調して提示することができる。

5 研究結果と考察

ICTを活用した授業を実施したあと、事後の意識調査を行い検証した。(表6)

「ICT授業についてどのように感じましたか?」という質問に対して、日本史の好き嫌いを問わず、全体で52%の生徒が「ふだんの授業に比べて理解が深まった」、「今までに比べて日本史に興味をもてた」と回答しており、ふだんの授業に比べて自らの日本



図3 表5例① 生徒の撮影した資料の例



図4 表5例② 異なる文化の比較の例



図5 表5例③ 藤原家出身公卿の変化の例

史への興味を向上させたり、理解を進めたと認識していることが明らかになった。

表6 ICTを活用した授業についてどのように感じましたか？ (人)

	全 体	日本史好き	日本史嫌い	どちらでもない
ふだんの授業に比べて理解が深まった	29 (30%)	15 (56%)	4 (11%)	10 (29%)
今までに比べて日本史に興味をもてた	21 (22%)	3 (11%)	15 (43%)	3 (9%)
ふだんの授業より理解がしにくかった	7 (7%)	0 (0%)	2 (6%)	5 (15%)
今までに比べて日本史が嫌いになった	1 (1%)	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)
ふだんの授業と変わらない	38 (40%)	9 (33%)	13 (37%)	16 (47%)
計	96	27	35	34

また、日本史嫌いの生徒に着目しても、半数を超える生徒が、ふだんの授業に比べて日本史への興味を向上させたり、理解を進ませており、ICTの活用には効果があったといえることができる。

また、日本史を嫌いな理由に着目すると、事前の意識調査に比べて事後の調査では「ストーリー性がなくてつまらない」を挙げた人数が減少している。

このことから、ICTを活用して政治、経済・社会、文化を相互に関連付けする(図6、図7)ことで、ふだんの授業以上にその時代の歴史のストーリーを紡ぐことができ、日本史のもつストーリー性をふだんの授業以上に生徒に伝え、日本史嫌いな生徒にも日本史のストーリー性を感じさせることに有効であるといえる。

つまり、日本史の授業におけるICTの活用が、生徒に日本史に興味や関心をもたせ、意欲を高めるのに効果的であるといえる。

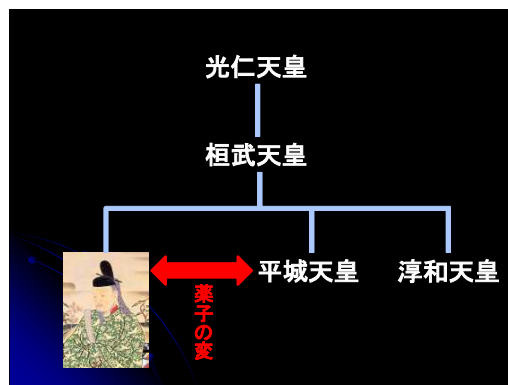


図6 嵯峨天皇を中心に文化、政治に関連付けて示した資料の一部



図7 藤原実資を中心に文化、政治に関連付けて示した資料の一部

6 今後の課題

最後に、本研究を踏まえて、授業へのICT活用における課題をまとめておきたい。

まず、前述した先行研究での指摘(猪迫、2007)や本校の現状を含め、高等学校には特別教室以外にはICT機器が十分に整備されておらず、ふだんの授業からICTが十分に活用されていない部分があると言わざるを得ない。そのため、ICTを活用した授業を実施する際、教室の準備がふだんの授業に比べ、手間のかかることが課題の1つである。

2つ目の課題は教材データの作成の点である。ICTを利用した授業を実施するためには新たにICTのための教材データを作成しなければならず、ソフトウェアに慣れるまでに教材作成の時間がかかってしまうという問題点がある。

3つ目の課題は、表6で「ふだんの授業に比べて理解が深まった」や「今までに比べて日本史に興味をもてた」と回答している日本史嫌いの生徒が、本研究の3回のICTを活用した授業を通して、日本史を「好き」だと感じるまでの変容には至らなかったことである。

これら3つの課題の解決し、ICTの活用によって生徒の日本史への関心・意欲を向上させるためには、教科を越えて、教員間でICTデータの作成を協力して効果的に行い、そのデータやICT機器を共有し、継続的にICTの授業を展開していくことが必要であると考えられる。



図8 プレゼンテーションソフトを活用した授業の様相

参考・引用文献

- (1) 内閣府(2011)「2011年度版青少年のインターネット利用環境実態調査」
- (2) IT戦略本部(2001)「e-japan戦略」
- (3) 清水康敬、山本朋弘、堀田龍也 他(2008)「ICT活用授業による学力向上に関する総合的分析評価」『日本教育工学論文誌』32
- (4) 猪迫広樹(2007)「関心・意欲を高め、学力の向上を支援するICTの在り方 ―活用の目的に合わせたデジタル教材の作成と活用を通して―」『福岡市教育センター研究紀要』778
- (5) 白樫明宜(2011)「教育の情報化《次の一歩》を考える 学力向上をめざして ―授業における電子黒板の活用とその効果について―」『視聴覚教育』65-12
- (6) 野中陽一(2011)「現実的なICT活用のための普通教室のICT環境(シンポジウム 学校現場の情報化をどのように推進し支援するか、教育情報イノベーション ―デジタル世代をそう導くか―)」日本教育情報学会『年会論文集』27
- (7) 小井戸政宏(2010)「子どものやる気を引き出し、確かな学力を付ける指導の在り方 ―電子黒板の活用を通して―」日本教育情報学会『年会論文集』26
- (8) 山田智之、野中陽一、石塚丈晴 他(2010)「普通教室における日常的なICT活用を支える投影環境の検討」『日本教育工学会論文誌』34
- (9) 大島浩(2007)「高等学校世界史におけるICTの活用 ―電子黒板を使った授業展開―」『学習情報研究』194
- (10) 才津芳明(2003)「学習意欲を高めることを目標とした体験学習型の英語授業と教材開発」『東海大学紀要』11
- (11) 中央教育審議会答申(2008)「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」
- (12) 高等学校学習指導要領解説地理歴史編(2010)文部科学省